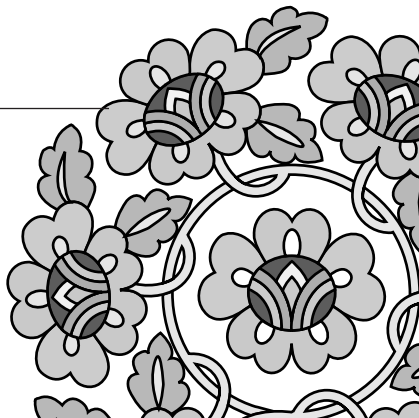


なまえのある家「わのわ」

## 同じ屋根の下で

近藤 直子



数百のムラ(集落)からなる少数民族の地、大和高原。お盆になると、ほとんどの家で祖霊を迎える祭祀が行われているためか、ムラの空気はいつもより濃厚になり、山間全体が不可思議なオーラに包まれているかのよう。迎え火、餓鬼棚、一日に五度お供えする柿葉に載せた古風な供物、アラタナさん、多い家では百回ほども取り替える茶湯(お供えのお茶)、そして送り火…。

でもその空気は決して重いものではなく、魂の家族たち、精霊を迎える喜び、絆の再生を促すあったかい懐かしさを広げてくれるもの。

A家の縁側の奥に、山から切り出した竹とヒノキでしつらえた梯子つきのミニチュアの家「アラタナ」がしつらえられたのは、8月初旬。中に入れられた写真には、昨秋亡くなられた90歳代の古老の微笑み。お礼のご挨拶をすると、ふんわりと包み込んでくれるかのような、なんとも温かな気配。初対面ながら、顕幽を超えた邂逅に、思わず涙。

一見、封建的に思われがちな少数民族の地、大和高原に暮らして7年。この地は、家族の近代的な定義に囚われることなく、家族関係の葛藤を穏やかに昇華してくれるような、新旧のおおらかなスピリットに満ちています。土着の風習は一見、「形式的」に思われがちですが、実際にその一端に触れてみると、家ごとに異なる多様なしつらえが、【家族を取り巻く世界をゆるりと広げてくれる】ことに気づくのです。「人間関係」という目に見えるものだけに注視しがちな現代人の限定的な意識を解放し、時空を超えたりアルな魂の交歓を促す。

そんな家庭内祭祀の中心にあるのは、日常の「衣食住」。なかでもとりわけ「住」、つまり「家」がポイントになっているように思います。祭祀は家ごとに非常に多様性に富んでいて、他家をまったく気にすることなく、家族みんなが堂々たる神官を勤めます。必要な道具類は、田畑や裏山で採取した素材で工夫をこらしてしつらえます(宗教や家元制度のように、総本山から取り寄せる必要はナシ)。

マニュアルや講習会受講の必要もなく、長生きしている人から若い人へと、段取りは自ずから伝わっていきます。

そしてムラで生活してみても感じるのは、決して血縁だけが重んじられているわけではないということ。かといって、地縁だけを重視しているでもない。かつて大家族であることが一般的であったこの地域では、「家族」の内訳は非常に多様で、見ず知らずの居候の滞在のほか、カイコ、ニワトリ、犬、牛、ヤギ、羊などなど…、非常に賑やかな日常が母屋で繰り広げられていたようです。

要するに大切なのは、【同じ屋根の下】ということ。すなわち家の祭祀とは、【目に見えない存在をも含めて、同じ屋根の下、共食の絆を再生するためのバトン】のようなものだったのです。

…  
ところで昨年、私の家族は3人から2人になり、今年、2人から4人になりました。そして人数が変わる度に、「家」も変わりました。どちらかという珍しい家族構成なので、(家族とは、パートナーシップとは、親子とは、何ぞや?)というテーマが、折々に浮上してきます。我が家の屋根の下には、現代的にみればちょっと風変わりな住民たちが暮らしていますが、このご縁はまさしく、今住んでいる「家」との不思議な出会いが呼び寄せたものでした。

大和高原では、手直しを続けながら百年以上わたって家屋を継承するのが一般的です。以前、柳生で暮らしていたときは、住まいである古屋の再生プロセスにかかわることができませんでした。今回は主婦として家の再生にかかわることになりました。我が家「わのわ」の再生作業はすなわち、血縁を越えた家族というものの本質を見直すプロセスそのもの。それは今もこれからも、エンドレスで進行していくのでしょうか。

家でもっとも大切なのは、基礎。この大地にしっかりと根ざしてこそ、柱が建ち、棟が上がり、皆が集うことのできる屋根ができます。そして火と水の交わる「食」を共にする場、「家」が生まれるのです。大切なのは、

何よりもまず母なる大地に根ざすこと。

随分前ですが、祖霊の系統より「わたしは巫女である前に、何よりもまず、【一家の主婦】であった」というリーディングが降りたことがあります。この地上世界における母性とは、リアルな自然、つまり地球の母性と共鳴してこそ発露されるものであって、それはこの普段の日常生活で、今ここの大地に根っこを生やすことから始まるのでしょうか。根っこを抜きにして、いきなり「天界、変成意識、選ばれた特別感」など…、特別な言葉が先行する流れは、非常に危険だと感じています(※最近再び、「ヒーリング」、「エネルギー伝授」、「アチューンメント」、「セッション」と称して、美しい仮面を被った非常に危険な存在たちが、エネルギー搾取の機会を巧妙に狙っているように感じています。すべてが危険だとは言いません。しかし何らかのエネルギーにリンクするときには、「日常の根っこ」の感覚をたよりに、どうか十二分にお気をつけください)。

…  
陰陽和合の秘儀は、足下にこそ。大和高原の家庭内祭祀が教えてくれること。クラタテ神事のカタチが何故、クロス(十字)に中心なのか。年迎え行事の拝み膳のレイアウトが何故、クロスに中心なのか。

一人一人がこの大地とつながって和合し、みんなで同じ一つの屋根を支えるため。地に落ちた種は、まず根を伸ばし、芽を出す。今ここの家族とともに、「屋の根」を建てよ。これぞ、クラ(神座)タテ。

生涯、無名であった方々。遠い誰かに知られることもなく、静かに続けられてきた日常生活。大地そのものとの一体化し昇華された、人々の鼓動。私たちの生命もまた、本当はこの名もなき存在たちに支えられているのではないのでしょうか。

地霊とも、カミサマとも呼んでもいい。それは崇め奉るだけの対象ではなく、日常生活を共にする親しき存在「家族」なのかもしれません。大地とつながり感謝と共に生きるならば、旅人や余所者であっても、きっとその波動を感じ取ることができるはず。

日々の暮らして感じるささやかな喜びは、決して自分一人だけのものではなかったのです。より大きな存在とともに御柱を支えながら感じる、みんなの素朴な思い。～この屋根の下、みんなで仲良く暮らしていこうよ。

近藤直子

ブログ「日月出づる処へ」

<http://rupa.exblog.jp/>